

鎌倉市中央図書館

# 近代史資料室だより

第1号

鎌倉市中央図書館  
近代史資料担当  
鎌倉市御成町20-35  
電話 0467 (25) 2611

## 発刊にあたって

鎌倉市図書館は開館百一年目を迎える平成二十四年度、昭和五十二年に開設した近代史資料室を更に充実させるため職員を置き近代史資料担当に組織変更しました。

そしてこれを期にこの「鎌倉市中央図書館資料室だより」を発刊することにしました。世界遺産登録に向け鎌倉の中世が注目される中、今迄コツコツと収集・整理してきた近代史資料を皆様方にご紹介していきたいと思えます。皆様方と図書館を繋ぐ懸け橋となれば幸いです。  
今後ともよろしくお願いいたします。

中央図書館長 古谷 修

## 鎌倉海浜ホテル追憶

(その1)

研究ノート ①

かつて由比ヶ浜の松林の中にゆったりとした姿を見せていた西洋建築「鎌倉海浜ホテル」を記憶している人も少なくなってしまう。終戦直後の火災によって姿を消してから七十年近くも経つのだから無理もないことである。

その場所は海岸通りの海側、旧地番で乱橋材木座一〇一、一〇二、一一五四〜一一五七、一一七八、一一八〇〜一一八四番、大町飛地二四五二〜二四五四番他、現在の由比ヶ浜四丁目八、九に位置しており、最近まで海辺のテニスコートとして市民の憩いの場であった。今は跡地にマンション建設が進んでいる。

### 創設期

明治二十年代に遡るこのホテルの創設について考えてみたい。

まず初期の目的はホテルではなくサナトリウム(療養所)であった。名称は「鎌倉海濱院」

### 目次

- ◆ 発刊にあたって ..... 1
- ◆ 研究ノート① ..... 1
- ◆ 鎌倉海浜ホテル追憶(その1) ..... 1
- ◆ モニュメント① ..... 6
- ◆ 鎌倉町立図書館記念碑「間島君旌徳碑」 ..... 6
- ◆ 寄贈資料紹介 ..... 6
- ◆ (寺分村の「高札」・マンホールの蓋・写真帳) ..... 6
- ◆ 古文書 ..... 7
- ◆ 関東大震災手記より① ..... 7
- ◆ 古写真 ..... 8
- ◆ インタビュー(むかし語り)① ..... 8
- ◆ 日本画家・葛原輝さん ..... 8

である。設立の時期について、明治十九年七月説(鈴木三五郎「鎌倉海濱ホテル発祥の由来」昭和19年10月・相原典夫「鎌倉海浜ホテル考」『鎌倉』34号昭和55年5月)があるが、ここでは新聞記事により明治二十年八月一日開院としておく(毎日新聞 明治20年7月29日「鎌倉海浜院八月一日ヨリ開院ス」・『鎌倉市史近代通史編』138頁)。

鎌倉の海岸に洋式の保養所を建設しようとする動きは、すでに横浜の富豪商人の間に明治十五年には起きていたという(『鎌倉市史近代通史編』137頁)。しかしその頃、横浜の有力生糸売込商、原善三郎、茂木惣兵衛らは、外国商人達と対抗するために「連合生糸荷預所」を設立し、生糸取引の窓口一本化に取り組んでいる最中であった。この運動は失敗に終り、「こ

の事件の頃は、善三郎ら売込商にとつてまさに危機の時代であった」と言われている（『横浜商人とその時代』横浜開港資料館 平成 6 年）。松方デフレといわれる不況時代であり、明治十五年は定期的に事業を進めるには問題があったと思われる。その後彼らは都市銀行と提携しながら、輸出生糸を一手に掌握し再度実権を握っていき、さらに政界にも進出した。明治二十年はそのような時期であった。

明治二十年八月七日付「毎日新聞」には出来たばかりの鎌倉海浜院が紹介され、錚々たるエリート医師達と横浜の財界人の名前が並んでいる。彼ら横浜商人との経済的人的な結びつきによつて「海濱院」が設立されたといえる。

### 長与専齋

海浜院設立を中心的に進めた政府高官・医師に長与専齋（ながよせんさい）がいる。長与の功績を顕彰する大きな石碑が長谷高德院大仏脇に今も建っている。

天保九年（1838）肥前国大村藩侍医の家に生れた長与は、大坂の蘭学者緒方洪庵の「適塾」に入門し、塾頭を務め、次いで長崎医学伝習に参加し、ポンペや松本良順から当時最新の西洋医学を修めた。大村藩侍医、長崎医学学校頭を務めた後、明治四年文部省に出仕する。そして岩倉遣欧使節団に随行し、欧米の医学制度

を視察した経験を初代衛生局長時代（明治 7（24 年）に発揮し、近代日本の衛生行政・制度の基礎を築いた。元老院・貴族院の議員などを歴任し、明治三十五年に没した。

鎌倉の海が海水浴に最適であると最初に評価したのは、ドイツ人医師 ロベール ベルツである（明治 12 年）が、その後さらに長与専齋が鎌倉を海水浴に最適と紹介し、横浜の富商茂木惣兵衛らと図り、「鎌倉海濱院」を創設した。自らも転地治療に鎌倉海浜院へ赴いたり（『読売新聞』明治 22 年 12 月 4 日・『醫譚』復刊第 95 号上田卓爾「日本及び欧米の海濱院について」参照）、海浜院東側海寄りに別荘を建て、家族で由比ヶ浜に遊んだようである。

長与専齋が起草したと思われる「鎌倉海濱院創立ノ趣意書」（明治 20 年 7 月）から海浜院設立の趣旨を読み取ることができる。

西洋において始まった「サナトリウム」（趣意書では「海浜撰養所」と訳）を紹介し、海浜保養の効能を説いている。虚弱体質の人、腺病性の小児のために清浄な海気と海水浴、善良の食料、適度な運動を一定の規則を設けて組み合わせることが体質改善に極めて有効であること、そのために鎌倉は三方を山に囲まれた地形、南にひらけた遠浅な海、温暖な気候、豊富な景勝地、古跡、繁茂する松林、適度の生活の利便性などに恵まれ、「海濱院」を創設するのに最

適な地であると説く。当時の人々が苦しみ恐れていた結核療養及び予防のための施設である。当時の『大日本私立衛生会雑誌』（第五十号明治 20 年 7 月 30 日）にも「鎌倉海濱院」が詳しく紹介され「此肺病素因ヲ有スルモノハ主モニ中等以上有為ノ人種ニ多ク」と結核との関係が述べられている。

明治半ばに入ると開港地横浜に隣接し、東京の郊外に位置した鎌倉は、温暖な気候に恵まれ、すでに都会人にとつて保養地、別荘地として好まれ、明治政府の政財界人をはじめ、教育・文学、医学関係者たちが次々と別荘を構えていた。彼等に影響を与えた「海浜保養」の思想は、明治政府のお雇い外国人医師ベルツ博士や岩倉遣欧使節一行の西洋体験によるところが大きいといわれる。明治の幕開けとともに草深い鎌倉にも、西洋文化がどっと押し寄せてきたのである。

### 院長近藤良薫と医師勝見正成

次に実際に海浜院院長となった医師近藤良薫（こんどうりょうくん）について見てみよう。

嘉永元年（1848）三河国半田で出生。元服後青雲の志をもって江戸に出、慶応義塾に入り、経済と英語を学ぶ。その後医学を学ぶため明治三年横浜へ出る。慶応の先輩で医師として

働いていた早矢仕有的（はやしゆうてき）の静々舎（境町二丁目、若い学生の勉強塾）に入り、実地医学を学んだ。翌四年南仲通三丁目に移り、「横浜病院（十全病院）規則」（明治5年）には代表七名の医師の一人に入っている。明治六年には神奈川県立横浜病院で診療を担当。その時米国人医師シモンズに指導をうけ、シモンズの著書（邦訳名『微毒小箒』）を義塾の先輩松山棟庵と翻訳筆記した。

明治八年真砂町に開業し、三浦郡の医師清水舉民に医学を教えた。明治十一年野毛山に賛育病院を建て、さらに横浜医学講習会を作って医師同士の勉強の場を作った。医学講習会は度々開かれ、県下にも同じ会ができた。明治十二年コレラ流行に当って医師らと地方検疫委員となって伝染病予防にも努めた。そして明治二十年には長与専齋に協力して、鎌倉に海浜院をつくった。

当時の土地所有記録を見ると鎌倉海浜院の地はほぼ近藤良薫の名義となっていた（「土地台帳」）。そして周辺の土地所有者の中には茂木保兵衛、小林米珂など横浜商人、帰化弁護士の名前が並んでいる。

さらに近藤は横浜市参事会員になり明治二十六年野毛山の病院を近藤病院として神奈川県医会設立、医師会長となる。明治三十年代になって、横浜の茶輸出商大谷嘉兵衛に誘われて

横浜に本店を持つ第七十四銀行取締役になり、経済界にも進出。しかし好事魔多し、呼吸器に病変が見つかり、明治三十五年五月十九日に他界した（『横浜医療事始め』小玉順三2002年 横浜総合医学振興財団 市大医学部内）。

次に海浜院の隣地に住み実際に宿泊客の医療に従事した勝見正成（かつみまさなり）について紹介しておきたい。

勝見の墓は長谷寺にある。最近鎌倉市医師会で墓地を整備し記念碑建立が進んでいる。

「明治二年 由緒一類附 勝見忠太郎」（金沢市立玉川図書館近代史料館）によると、父勝見意平は加賀藩士、勝見家へ養子に入り、江戸表御使御用、御勝手御用などを勤めていたが、安政六年（1859）に若くして病死した。正成（忠太郎）は安政六年に誕生し、十一歳で祖父惣左衛門の跡目を継ぎ七人扶持を給される。祖父も御勝手御用、高岡町御奉行などを勤めていた。勝見は、明治九年に金沢医学所に入學し（金沢大学資料館紀要『金沢大学の淵源』2012年10月刊）、医学を志した。横浜、そして鎌倉へ出てきた詳しい経緯はまだわかっていない。勝見もまた活発に社会事業に取り組む人であった。鎌倉郡医会の初代会長（明治25年）になり、鎌倉町会議員として活動し、鎌倉同人会理事として陸奥廣吉伯爵と共に鎌倉

町の発展に寄与した。昭和五年六月五日夜没。



鎌倉海浜院玄関正面 明治26年頃  
阿部家所蔵

### 海浜院の療養生活

ごく初期の頃の海浜院での療養生活がどのようなものであったか、阿部家記録『由比濱隨遊私記』（山岡謙介 明治20年）から引用してみよう。

旧備後福山藩城主阿部正方の妹「恪子様」が、創立間もない「海濱院」に滞在した折の様子を阿部家家令山岡謙介が詳細に記録している。八月二十八日から九月十三日までの二週間ほどの滞在である。建物の設備、院規則による浴海、飲食、海浜史跡の逍遙そして滞在客の様子などである。

食事について次のような記述がある。

「飲食ハ洋食ヲ主トス。若シ和食ヲ欲スルトキハ食前三時間之ヲ事務所へ告グベシ。凡飲食

ノ定規、朝六時牛乳五勺ヲ寢室ニ送ル。一飲ノ後当ニ戸外ヲ逍遙スベシ。七時朝食、十二時午餐、四時喫茶、七時晚餐、病客ヲ除クノ外ハ皆食堂ニ会食ス。(中略)滋養物ヲ食シ海水ニ浴スルハ本院摂生ノ主要ト雖モ独リ浴海ヲ以テ運動足レリトスベカラズ。時ニ海浜ニ逍遙シ、或ハ近傍名勝ヲ探ル、皆摂養ノ緊密事ナリ。」

八月廿八日に撰った食事として、「昼食 ポイル鰹魚・ビーフカテレッツ・鶏シチウ・グナラ フライケーキ・梨菓・竜眼肉・珈琲」、喫茶には「紅茶・菓子」、晚餐に「スープ・ポイルチキン・ビーフハヤシ・ライスカレー・プリン・木菓・珈琲」の記述がある。

また滞在中、華族女学校の友人長与女らと鎌倉・江の島の名所旧跡を精力的に散策している。鶴岡八幡宮、鎌倉宮、頼朝邸跡、宝戒寺、光明寺、長谷大仏、建長寺、海蔵寺、七里ヶ浜、江ノ島、権五郎神社などである(阿部正道「明治前期の鎌倉遊覧」『鎌倉』13号昭和39年9月 参照)。

ちなみに鎌倉にあったサナトリウムを概観してみると、「鎌倉海浜院」はその嚆矢と言えるが、その後中村恵風園(明治32年)・鎌倉病院(明治32年)・鈴木療養所(明治44年)・額田保養院(大正9年)・聖テレジア七里ヶ浜療養所(昭和4年)・林間病院(昭和8年)と湘南地域でも多数をしめる(高三啓輔『サナト

リウム残影』日本評論社2004年参照)。

#### 「株式会社鎌倉海濱院ホテル」へ

この海浜院は厳格な規則をもったサナトリウムとしてスタートしたが、程なく多くの貴顕紳士や外国人客を受け入れホテルへ転換した。当時の新聞が宿泊客の名前を載せてその盛況ぶりを宣伝している。中には新島襄や原敬が宿泊し静養したこともうかがえる。

初期から重篤な患者を受け入れるものではなく、保養所の様相が強かった。明治二十一年四月十一日付の「読売新聞」にも「同院ハ衛生上頗る適當の地なるより追々盛況ニ赴き浴客も少なからざる由なるが、其多くハ外国人にて就中小児最も多く京濱の重なる外国人ハ何れも保母に託して小児を此處に養育せしめ土曜日曜等にハ其父母保養かたがた一泊掛けに遊ぶと云ふ」とあるようにリゾートホテルに移行する要素が強かったのである。

院長近藤良薫の土地所有の履歴も明治三十四年で終わり、生糸商青山和三郎や横浜在住の英国商人に経営が移っていく。長与専齋も由比ヶ浜の海で次女の溺死という不幸に遭い、その悲しみから明治二十七年には鎌倉から離れている。

ホテルの経営は盛況のうちに始まったが、鎌倉が外国人遊歩区域に入っていた有利な条件

も明治三十二年の内地雑居の始まりと共に消えて行き、日光、箱根などとの競争が始まった。ホテルを株式会社経営にして立て直しを図ったと見られるのが明治三十九年十月である。本店は横浜市山下町、資本金五万円、取締役には、山下町在住の英国商人やアメリカ人帰化弁護士、日本人生糸商人らが名を連ねている。そのうち唯一の日本人青山和三郎は医師近藤良薫のあとをうけて土地の名義人となりホテルの支配人を務めている。

また同時期に建物の大改築を計画し、有名な御雇い外国人建築家ジョサイヤ・コンドルに設計を依頼した事が、現在京都大学に収蔵されて



鎌倉海浜院ホテル遠景

ジョサイヤ・コンドルの設計図を元に改築された海浜院ホテルを海側砂丘上から見る。 明治40年頃

いる数葉の設計図から推測される。しかしコンドル作品集には「鎌倉海浜ホテル」の記録が無く設計から施工の間に何があったのか疑問が残るが今後の課題としたい。

その後は充実した設備と豪華な宿泊客によって、湘南の帝国ホテルと称され、明治・大正・昭和の時代を歩んできた。鎌倉の町の住人が気軽に利用出来る施設ではなかったが、クリスマスパーティーや結婚式の思い出を持つ方もいらつしやる。占領軍の失火で昭和二十年（1945）十二月と昭和二十一年一月の二度の火災によって焼失するまで六十年近くの歴史を刻み、町の重要な顔として存在し続け、町の商業や文化ともつながっていた。

焼失後、長らく草原が残っていたが、昭和五十二年（1977）に「株式会社鎌倉海浜ホテル」経営の「鎌倉シーサイドテニスクラブ」として再出発し、かつての海浜ホテルの面影を残しながら市民に親しまれてきた。平成二十二年（2010）六月に終焉を迎えるまで、明治の設立から一〇〇年近い歴史を歩んだのである。

（平田恵美記）  
（次号にて「海浜ホテルの変遷」「建物考」などを予定しています）

年	海浜院関連事項（略年表）	
明治 20 年	1887	「鎌倉海浜院」(サナトリウム)開院(8月1日)（『毎日新聞』7月29日） 発起人:長与専斎・近藤良薫(賛育医院)・中山安次郎・亀屋善三郎(原)・茂木惣兵衛(茂木銀行頭取)
		「寝室は楼上楼下三十餘室あり、新聞縦覧所あり玉突場あり食堂は百人会食するに足り浴室は男女を区別し温浴すべく冷浴すべく又雨浴すべし…(朝)着替えをする前に部屋に牛乳来り…別に一棟あり、診療所薬局普請中」(『大日本私立衛生会雑誌』51号8月27日)
		伯爵阿部正方の妹恪子氏滞在(8月28日～9月13日) 院長近藤良薫 主任医師勝見正成
		「来客は五十名計りにして、中に華族大村君・同阿部君・芳川内務次官・渡辺大学総長夫人・佐藤進氏令閨・岩崎参事官、外国紳士七八名参りおらる、…別に塩湯の設けもあり」(『毎日新聞』8月31日)
明治 21 年	1888	同志社大学設立奔走中の新島襄が静養(5月24日～6月10日)
明治 22 年	1889	「海浜院の客 目下非常の繁盛 内国人凡そ十人外国人凡そ四十人…内国人の重なる人々ハ山田伯、奈良原夫人、同令嬢、工学士藤本為吉、愛知半田ノ豪商小栗三郎の諸氏なりと」(『毎日新聞』8月16日)
		奈良原時子(華族女学校在学中)が滞在(8月11日～25日)(『鎌倉日記』)
明治 29 年	1896	原敬(当時外務省通商局長)が滞在(1月2日) 「二日午後より鎌倉海浜院へ赴き取調べものをなしつつ休養せり、宿泊人は外国人のみにて頗る静閑なりし」(『原敬日記』)
明治 39 年	1906	ジョサイア・コンドル 海浜院ホテル設計(7月)
		株式会社鎌倉海浜院ホテル登記 本店 横浜市山下町70番地 資本金5万円 1株金50円 振込株金額50万円 横浜に於いて発行する英字日刊新聞にて広告 取締役: エル、ジェー、ヒーリング(山下町22番地英国臣民) エドウィン、エディン(同所 英国臣民) 小林米可(山下町70番) エー、ジー、エム、ウォール(関内町50番英国臣民) 青山和三郎(鎌倉町乱橋材木座1182番) 監査役: ティー、エッチ、バッグバード 存立の時期50年 明治39年10月22日登記簿第157号に登記 (『貿易新報』10月24日) <i>(次回「資料室だより」へ続く)</i>

# モニュメント ①



## 鎌倉町立図書館記念碑 「間島君旌徳碑」

昭和十一年に建てられた町立図書館は関東大震災後町民待望の独立図書館でした。現在も御成小学校校門脇右側に二階建ての古い建物が残っています。昭和四十九年に現在の中央図書館が建つまで戦前戦後の時代を鎌倉の知的センターとして市民に愛されてきました。

手前に建っている仙台石のどっしりした記念碑は、この建物を寄附した間島弟彦氏を顕彰したものです。撰文は鎌倉高等女学校校長田邊新之助氏、題字は鎌倉国宝館初代館長荒川巳次氏です。銀行家であった間島氏は大正・昭和と鎌倉市内に住み、大正四年に設立された鎌倉同人会の創立メンバーとなり、鎌倉の歴史・文化・自然保護に力を尽くしました。昭和三年没後、弟彦氏の遺志を継いだ愛子夫人からは図書館だけでなく鎌倉国宝館、小学校などにも多額の寄附が贈られました。(昭和十一年三月建立)

## 寄贈資料紹介

### 寺分村の「高札」

江戸時代から明治初めにかけて街道沿いの宿場(しゅくば)や村々の辻には「高札場」(こうさつば)が設けられ、庶民にたいして幕府や新政府の基本法令を示すため、墨書した大きな木札が掲げられていました。

鎌倉市域にも江戸時代には三七ヶ所の高札場があったようです。『新編相模国風土記稿』鎌倉市寺分(てらぶん)の旧家の蔵の中に百四十年余りも眠っていた六枚の「高札」があります。そのうちの五枚は慶応四年(一八六八)、明治新政府が王政復古の号令のもと最初に掲げた「五榜の掲示」といわれるものです。保存状態がよく、墨の色もいまだに鮮やかです。

平成二十三年度中央図書館郷土資料展「鎌倉の高札」より



定 人たるもの五倫の道を正しくすべきこと… (五倫の道の勧め)



定 切支丹宗門の儀は、是まで御制禁の通り… (切支丹・邪宗門の禁止)

## 写真帳



二階堂理智光寺跡 昭和 10 年頃

青年団建立の碑がポツンと立っている。現在この谷戸は開発され、通称江ノ電住宅と言われている。尾根は浄明寺側胡桃ヶ谷団地に通じている。(高見千代子氏旧蔵写真帳より)



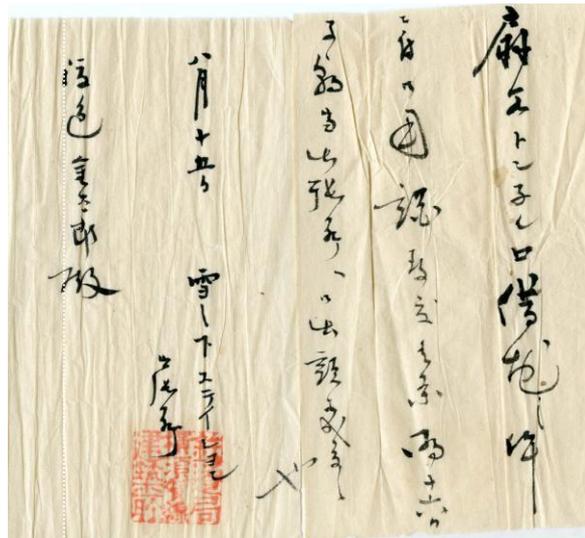
マンホールの蓋

OGCのマークは「大船ガーデンシティ」の略称

大正時代末、大船駅東口一帯が「大船田園都市」として開発され、理想の街づくりをめざした。残念ながら関東大震災とその後の金融恐慌で頓挫したが、今尚街路などに名残が残っている。このマンホールもその一つである。現在、掘り出され図書館で収蔵。『幻の田園都市から松竹映画都市へ』(鎌倉近代史資料集第 13 集) 参照

## 古文書

資料室には大町「三九文書」・「山ノ内村御用留」・関谷「落合家文書」・「平井家文書」・植木「小坂家文書」・大船「大津家文書」・扇ガ谷「渡辺家文書」など江戸から明治期の文書が保管されています。その中から一点ご紹介いたします。



「扇谷トンネル口借地之件ニ付御用談致度候条  
明十六日早朝当出帳所へ御出頭相成度候也  
八月十五日 雪之下ステイション

渡邊金太郎殿

出帳所印

＊明治二十一年横須賀線開通に向けて突貫工事が行われるなかトンネル周辺の土地借り上げが行われていたことを語っている。(扇ガ谷「渡辺家文書」より)

### 関東大震災手記より ①

(略)翌朝鎌倉の我が家へ帰るべく、列車を乗りついで大船駅のホームを間近にした午前十一時五十八分でした。あの関東大震災に遭うんです。いきなりドーンと来て車輛ごと大きく浮き上がったかと思うと、横に傾いたまゝ再び地上にたゞき付けられるんですからたまりません。むろん全車輛脱線転覆で、車内は正に阿鼻叫喚の地獄です。夢中で近くに居た血まみれの子供を一人抱えて、碎かれた窓から外へ這い出るんですが、それ以上どうする事も出来ません。強い余震続きでいつ車輛がつぶれるか分からない状況だし、医者といっても器具も薬も何一つ持っていないんですから、いくら怪我人が居ても手の施し様が無い訳です。

しかしそれでも、この様な場合ですから医者として何かやる事がある筈だと思い直して、いち早く外へ逃げ出した元氣そうな人たち五・六人に声を掛け、ともかく車内の怪我人を一人でも多く外へ連れ出してくれる様に頼み、その助けられた人たちにも呼びかけて、手持ちの風呂敷や手ぬぐいを裂いてもらって、急場しのぎの包帯づくりです。そして私は、幸い大船駅が目の前でしたから駅長事務室に駆け込んで、「消毒液が焼酎があったら出してくれ」、といましたら、有難い事に両方とも有ったもんですか

らそれを持ち帰り、怪我人を一人一人診ては消毒し、止血の方法だけを指示しました。その数何十人だったのか何百人だったのか分かりませんが、その時それが精一杯の医療行為でした。こうして私は、一段落したあと大船駅から歩いて夕方近く鎌倉へ着くんですが、ほとんど町は全滅という惨状で、至る所火災です。あの悲惨な光景は未だに忘れる事は出来ませんが、その時不気味だったのは、シーンと静まりかえつて人の姿がほとんど無いということでした。ですから、もしかするとどの家も全員圧死か焼死したのではないかと、そう考えて一度に全身の血が引き抜けて行く感じでしたが、その時になつてはじめて家内や娘の身が不安になり、無事で居ることだけを念じながら、降りかゝる火の粉の町を我が家へと急ぎました。(略)

そんなところへ、つい数日前引越の挨拶に伺つてお目にかゝった町内会の石橋副会長さんが、向かいの御用邸から自転車で出て来られて、「横田軍医さん、奥さんと娘さんなら心配ありません。御用邸の庭にいらっしやいますよ。」と、大声を掛けて走り去られたんです。その時の嬉しさはたとえようがありませんでした。思わずワツと、道路にしゃがみ込んで泣いてしまいました。(第十四代埼玉県医師会長横田直正氏談話「関東大震災聞書控」加藤勉「埼玉史談」52・2)

★図書館では関東大震災体験手記を集めています。

## 古写真

★図書館では古写真を収集しています



大正14年頃の江ノ電小町停留所「待合所」の看板が掛っているが、売店としても使われていた。雑貨・雑誌・ステッキが所狭しと並んでいる。中央は邦栄堂、右奥に輸入煙草沢藤商店の看板が見える。(提供：邦栄堂書店)

## インタビュー（むかし語り）①

葛原輝さん（日本画家・元浄明寺住）

— 関東大震災の時は

関東大震災の時、葉山の借りた別荘にいた。九才だった。その日は午前中雨が降ったが晴れてたら海へ行っていたので津波にやられたかも知れない。ドンときた。庭へ転がり落ちたのか、大人が押し出したのかわからな

った。家には入れなくなって、松林の中で戸板と畳を敷いて、蚊帳を吊って過ごした。七日目に横須賀から駆逐艦で東京に帰った。横須賀の火薬庫に火が入れば、二里四方全滅らしいと言って、耳に栓を詰めたりして。結局決死隊が火薬を取り出したらしい。うちは大森と大井町の間、大井町の家は何ともなかったが、お袋は結核で震災の明くる年三十四才で亡くなった。

— 自由学園をやめたのは

絵を描きたかったのに、木工が始まったので。私は絵しか取り柄がなかったのよ。簡単に言うて嫁に行きたくなかったわけ。子供の時から歌舞伎が好きで、鬘に興味があつて、鬘をスケッチしていたら、お狂言の人が声をかけてくれて、遊びに来ませんかといわれた。野村さんなんか二十人ばかりで会をやつていて、同じ畳の上でやるのを何回か見に行った。まだ十八、九の小娘だった。木村荘八が自由学園へ教えに来ていたので木村先生のところへ相談に行つて人物画をやりたいというと、「じゃあ、鏑木さんだね」といって、最初に鏑木さんの所へ行った。その時鏑木さんは六十二才で「私は年を取つていますから、山川か伊東がいいでしょ」と、山川秀峰のところへポンとやられちゃった。鏑木さんはそのころ、小石川の能楽堂の側に住んでいた。二十三年に日展に初入選した時も、鏑木

さんにごあいさつに行きました。孫弟子ということになる。木村荘八は根っからの江戸っ子で、「ひ」と「し」がひっくり返つた。山川は三越友禅部の下絵描き。京都出身なので言葉を使ひ分けていた。だんだん男の人が出征していなくなったので、山川の書生さんに来てくれといわれた。先生は画室を建てたばかりで画室の守をしに行つたわけ。書生ですから、お子さんをお迎えに行つたりもした。防空演習というのがあるの。女中はダメだったけど、私は書生だから奥方の代わりに年中防空演習に出ていた。廃品回収や竹槍、白い割烹着を着て神社に集まつておもしろかった。私はすべておもしろいと思うの。(二〇〇五年五月インタビューより抜粋)

葛原輝氏は大正四年山口県に生まれる。二歳の時東京へ転居。自由学園時代から日本画に魅力を感じ木村荘八、山川秀峰に師事。二十八歳で姉一家と北京へ渡る。引き上げ後伊東深水塾に入門しひたすら画業にいそむ。昭和二十六年、三十六歳の時鎌倉へ転居。「鎌倉の自然を守る会」や「鎌倉市民」の同人として行動し、円覚寺帰源院での「漱石の会」創設に参加。月刊「鎌倉市民」にスケッチや口絵を連載。鎌倉市内「わらび会」で日本画を指導。展覧会を四十五回開催。現在は静養中  
著作 「鎌倉野の花・山の花」(神無書房) 他

「近代史資料室だより」第1号

発行 鎌倉市中央図書館近代史資料担当

平成二十五年三月一日